

一九世紀は近世・近代移行期とも呼ばれ、歴史上の大きな転換期の一つとみなされ注目されてきた。時代別の研究領域としては、近世史・幕末維新史・近代史にまたがるものである。守備範囲を決めることによって研究の精度が高まる一方、長期にわたる事柄が分断されてしまうといった弊害を生んだ。そこで、「近世・近代移行期」という時期区分を積極的に使用することにした。戦後の近世・近代移行期研究を振り返ってみると、平田国学に言及した論考も散見されるが比重は高くない。それに対して、本論文は平田国学に焦点を合わせて近世・近代移行期を見直してみるべきであると主張するものである。一九世紀に平田塾は急激に門人を増やした。この思想運動が当該期の国家・社会の変動と深いところで共振していたことを推測させるのである。逆にいえば、平田国学に焦点を合わせることで当該期の重要な特徴をつかむことができるのではないだろうか。一九世紀の日本型国民国家形成過程において、平田国学は吸収・統合されたのであろうか。平田国学の視座から一九世紀を見直してみなくてはならないのである。

戦後、平田国学をみる視線は大きく変化した。戦前・戦中に偏った取り上げ方をされたが、その反動で平田国学を忌避するといった傾向も生じたのである。しかし、その一方で平田国学を論じる視点について様々な研究者が模索していた。これは国学思想史と国学運動史の二つの研究潮流に整理できるであろう。戦後の研究の問題点として、①平田家当主や平田塾の動向に焦点を合わせた研究が手薄であること、②国学思想史と国学運動史の統合が必要な段階にきていること、③平田国学の研究が近世史と幕末維新史に分断されやすいこと、などを指摘しておきたい。

近年、新史料「平田篤胤関係資料」の調査・公開がなされた。平田神社に伝来した八九八点に及ぶ平田篤胤関係資料が、国立歴史民俗博物館で整理・公開されたのである。平田国学研究は、ここに全く新しい段階に入ったといえよう。また、地方国学資料の調査・翻刻も進んだ。さらに、近年、書物研究というべき方法がたいへん盛んになってきている。思想史研究と一般史学とは、しばしば水と油のようになりやすいが、書物研究はこの両者を架橋できる重要な方法であると思われる。従来の平田国学研究は、篤胤の著書といえば、全集本が無批判に利用されてきた。しかし、篤胤の草稿・写本・版本が全国様々な機関や個人宅に現存している。篤胤の著書の流布の実態と思想の伝播のあり方は、相互に密接な

関係にあったはずである。平田国学の研究を飛躍的に深化させるためには、これまでのように全集本を無批判に利用しているだけでは不十分なのである。

本論文は、平田国学の歴史的展開に焦点を当てることによって、思想運動の側面から近世・近代移行期を再検討することを課題としている。殊に、次の五点に留意して論述することにした。

①平田家や平田塾に視座を置いて考察する。従来の研究では、篤胤没後については、専ら門人の活動を中心に論じられ、平田家や平田塾の活動の解明が疎かになっていた。本論文はこうした反省の上にたっている。

②篤胤著書（稿本、写本、版本など）の書誌調査に力点を置き、さらに平田家と門人の往復書簡、気吹舎日記などに依拠しながら平田国学の思想の伝播の実態を明らかにする。これによって国学思想史と国学運動史の統合を目指したいと思う。

③国学史といった分野史・部門史としてではなく、平田国学の研究を近世・近代移行期を解明するための事例として論じること留意した。

④篤胤生前から没後の明治二〇年代頃までを射程に入れることで、近世史と幕末維新史に分断されやすい従来の研究の欠点を補いたいと思う。

⑤近代以後につくられた平田篤胤像・平田国学のイメージに依拠せず、一次史料を中心に検討することにした。

以上である。さらに、一九世紀の日本型国民国家形成過程において平田国学は吸収・統合されたのであろうか、こうした問いについて考察したのである。

（一）講説家篤胤の登場と講釈本

第一章で述べたように、江戸後期の学術世界に篤胤が登場するのは、市井の講説家としてであった。篤胤初期の国学総論は『古道大意』である。これは平田塾が「宇宙第一の正道」と称する講釈であった。篤胤生前、『古道大意』は主に耳で聞くものであったとみられる。平田塾では、篤胤没後の弘化元年に『古道大意』の清書本を作成して、門人の羽田野敬雄に頒布している。但し、「他見」を許さないなど、門人向けに限定したものであった。嘉永元年五月、平田塾はこれを刊行した。清書本と版本を比較検討すると、刊行に際してかなり加除訂正していたことがわかる。平田塾がこの著書を他の講釈本よりも重視していたということであろう。幕府の目を意識した加筆を行うなど、刊行には慎重であった。また、書袋に「不出書肆」とあるように、版本『古道大意』は門人に限定して頒布されたのである。但し、書肆に出さなかったのは一時的なことと考えられる。篤胤没後の弘化年間

には、平田塾の活動はかなり控えめであったが、嘉永元年五月の『古道大意』刊行以後、塾は毎年のように新刊の版本を出版するようになる。『古道大意』刊行は、平田塾による出版活動の実質的な再開を意味していたのであった。篤胤の講説を直接聞くことのできない没後の門人に向けて、「宇宙第一の正道」を平易に理解させるために刊行したのであった。但し、『古道大意』は元来、幕藩体制肯定の立場から書かれているため、幕末維新期の大きな社会的変革の過程で、時代状況との乖離が次第に大きくなっていった。平田門人などが様々な国学入門書を著したが、そこに、『古道大意』の新たな展開を窺うことができるのである。

第二章では、篤胤の俗神道批判の講釈本『俗神道大意』を取り上げたが、篤胤は生前、俗神道大意の講釈を行うとともに、自筆稿本『巫学談弊』を残した。内題に「俗神道論弁」とあるように、書名は必ずしも一定していなかった。篤胤没後、平田塾はこの講釈の内容を清書本にして頒布したが、篤胤の称号は「神祇道学師」となっていた。また、多様な転写本（四卷本・七卷本）や抄本も作成されて読まれていた。写本を読んでいたのは主に平田門人であったと考えられる。嘉永四年に坐摩版『巫学談弊』の不法な出版計画が持ち上がったが、足代弘訓の尽力によって結局刊行は頓挫した。幕末にいたって平田塾は『俗神道大意』（万延元年序）を出版した。清書本と比較した場合の版本の特徴は、①白川家側の序文が追加されていること、②巻二・四の各巻末に一文が追加されていること、③本文中の細部の表現が改変されていること、などである。このように版本『俗神道大意』は、門人によって加筆・改変された上で、幕末の平田学派の最盛期によく刊行されたのであった。しかし、刊行後も、平田塾では『俗神道大意』の流布にはかなり慎重であったことに注意しなければならない。幕末神道界における『俗神道大意』の位相はかなり微妙なものであったといえよう。

第三章でみたように、『西籍慨論』は儒学批判の講釈本である。篤胤は生前、漢学大意の講釈を行い自筆稿本『漢学大意』を残したが、出版はしていない。塾側では「平田の七部書」の一つとして「追刻」の計画も立てていたが、幕府の嫌疑・圧力を恐れて出版していないのである。平田塾では篤胤没後の嘉永四年頃から、『西籍慨論』の清書本を作成して、門人に限定して頒布している。外部に積極的に発信するものではなく、流布にはかなり慎重であった。しかし、安政五年に平田塾とは無関係に、木活字本の『西籍慨論』が刊行された。版元は「摺霞堂蔵」「摺露堂蔵」の二通りの表記がなされているように、実在の書肆ではない。この不法な出版に平田塾側は苦慮していた様子である。結局、明治三年一〇月

に平田塾は渡辺重石丸と羽田野敬雄の序文を付して『西籍慨論』を刊行した。維新後の国学派と漢学派の対立が激化した時期であったことに注意しなければならない。江戸時代以来の国儒論争の一環である。平田塾では改めてこれを刊行することで、漢学に対する国学の優位を門人や世論に確認させようとしたのである。明治三年頃には国学派・漢学派の衝突は収束に向かうが、すでに両派は洋学派の台頭に直面していたのである。

第四章で述べたように、『出定笑語』及び附録は仏教批判の講釈本である。篤胤は自筆稿本『出定笑語』の中で、仏教を否定してそれ以前からあったバラモン教の方を高く評価し、創造神梵天の祭祀を「甚たよろしいこと」と絶賛した。平田塾は『出定笑語』の清書本を門人に頒布するが、有力門人であっても容易に入手することは困難な状態であって、ほとんど流布していなかったとみられる。嘉永二年に不法な木活字本が刊行されるが、清書本の入手が困難であったことが遠因であろう。これは内容も大幅に削除されているのである。塾側は木活字を没収するなど厳しく対処するが、門人もこれを読んでいたのであり、学習活動に役に立っていたことは否定できない。不法に『出定笑語』を出版した佐久良東雄に、平田塾は厳しく対処するのであった。しかし、一転して文久二年に平田塾は『出定笑語付録』を刊行するにいたる。浄土真宗・日蓮宗を攻撃すべき神敵二宗として門人に周知させるためであった。この講釈本は神職などにひろく受容されていた。一方、幕末仏教界では、遅くとも文久期には『出定笑語』及び附録を、強力な排仏論として警戒していた。平田国学の隆盛に危機感を抱いていたが、平田塾側でも仏教界のそうした動きを把握していた。真宗側の反発がとくに顕著であり、反駁書の多くは真宗側によって執筆されたものであった。維新时期に平田塾は『出定笑語』本論を正式に刊行する必要に迫られる。鋳胤は明治二年に官許を得て、明治三年に刊行した。『出定笑語』は神仏分離・廃仏毀釈の進行する時期に、正式に刊行された点に注意しなければならない。幕末維新时期には、仏教側の反駁書が急増したように、この仏教批判書の影響の大きさを窺うことができるであろう。篤胤の講釈本の中で、もつとも反響のあった著書であった。

このように、篤胤による生前の講釈活動と没後における講釈本の流布とを明確にわけなくてはならない。篤胤は生前、平易な表現で民衆に直接訴えかけたのである。門人は豪農・豪商・神職といった社会的中間層が多かったが、篤胤自身はさらに下層の庶民に直接語りかけていたのである。幕末期に平田塾は講釈本を頒布するようになるが、しばしば同志以外に濫りに見せないように論じていたことに注意しなければならない。一方で、不法出版が相次ぐなど幕末期にかなりの需要があったといえよう。講釈本によって頒布の仕方、読

まれ方、影響力などが異なっていた。こうした平易な口語体の講釈本によって篤胤の思想は浸透していくのである。

(二) 平田国学の誕生と篤胤の幽冥研究

第五章で述べたように、篤胤が単なる講説家の枠を超えるのは、『靈能真柱』の刊行のときであった。篤胤が『靈能真柱』の草稿を執筆し、その後、門人大野広則が校正して版下を作成している。門人の協力によって著述は完成するが、この際、細部に大野の手が入っていた可能性がある。また、『靈能真柱』の彫師「菊地茂兵衛」は、式亭三馬の父と考えられるが、これ以後平田塾蔵版の版本にこの名前を見出すことはできない。平田塾では勢力の拡大とともに、より技術の高い彫師に変更していったのである。また、篤胤は校正刷『靈能真柱』を夏目獺磨に送っているが、出版資金の援助を求めるためであったと考えられる。鈴屋門人にも援助を依頼していたのである。版本『靈能真柱』を売り弘めたのは、当初は江戸の書肆であったが、後に三都や名古屋に拡大していった。篤胤は靈魂の行方について宣長の黄泉説を批判して幽冥論を提起したが、これは平田派の旗揚げを意味していたのである。平田国学が幕藩体制を前提とした思想運動であることも表明されている。この『靈能真柱』は平田国学の骨格をなすものであって、門人だけではなく書肆を通して門人以外のものにも広く読まれていった。『靈能真柱』の流布によって、篤胤は無名の講説家から時の人として思想界に登場したのである。

第六章では、篤胤のもう一つの主著『古史伝』の形成と刊行を取り上げて、平田国学運動の展開をみたのである。文化九年に『古史伝』草稿を起稿、文政八年に神代巻草稿を脱稿した。平田塾は『古史伝』を大いに宣伝しているが、篤胤自身はこの草稿を秘蔵していたのである。塗抹訂正箇所が多く清書が困難な状態であったため、門人からの筆写の許可願を断ることもあった。結局、天保一四年篤胤は未定稿の『古史伝』全三〇巻を残して世を去った。平田塾は、嘉永年間から清書本『古史伝』を頒布するが、各地の門人からたびたび『古史伝』送付の依頼を受けていたのである。殊に安政四年正月二四日、紀州藩からも古史伝の要請がきていた点は重要である。ただし、筆耕に手間取り各地からの依頼に応えるにはほど遠い状態であった。安政六年に羽田野敬雄は既に全三〇巻を入手しているが、これは例外であろう。文久期に伊那門人によって『古史伝』上木助成の機運が高まった。『古史伝』入手の困難性が、門人に上木運動を促したのだ。こうして同三年に、平田塾は『古史伝』刊行を開始する。やがて助成する門人は各地に拡がった。『古史伝』の刊行開始は、平田国学の隆盛を象徴しているのである。しかし、明治四年以後に平田派の退潮によって、

『古史伝』の刊行継続は難しくなっていた。錨胤没後は、胤雄が中心となって出版活動を継続していくのである。矢野玄道統修の『古史伝』は、卷三二まで刊行されて中断した。このように平田家は明治二〇年代初頭まで『古史伝』の刊行を継続していたのである。平田家にとってこれを刊行していくことが国学運動の重要な課題になっていたであろう。

また、平田国学の大きな特徴の一つは、幽冥研究である。『靈能真柱』に示された幽冥論のその後の展開に注意しなければならない。第七章で述べた通り、『仙境異聞』は錨胤の幽冥研究の重要な著書である。錨胤は仙童寅吉との問答を稿本『神童憑談記』にまとめたが、この草稿に表紙が付けられて外題は『仙童寅吉物語』となり、さらに改装されて『仙境異聞』となった。寅吉の発言に、「大かた神界の事の山人界より知られざる事、人間界より山人界の知られざるが如し」とある。神界・山人界・人間界という階層論が出ていることが注目されるであろう。

錨胤はこの稿本を秘蔵して公開には慎重であったが、平田塾は錨胤没後の頃より清書本『仙境異聞』を主に門人に向けて頒布する。全国各地の門人からの要請に応じて、錨胤は『仙境異聞』を送付していた。こうして仙童寅吉一件の詳細が、全国の門人に広く知られるようになる。転写本も数多く作成され、門人以外の者も密かに読んでいたとみられる。さらに、平田塾によって『仙境異聞』巻八として『幽郷真語』が追加されて読まれたのであった。『仙境異聞』は写本として流布することで、さまざまな反応を引き起こした。例えば、幕末期、三沢明・宮負定雄・平尾魯僊などの幽冥研究にも繋がっていくのである。何れにしても幽冥界の究明に多大の努力を傾けるのが平田派の大きな特徴であった。なお、平田派の幽冥研究は明治初頭の神祇政策（白峰宮建立など）にも影響を与えているのである。

第八章では、錨胤が池田冠山著『勝五郎再生前世話』の仏教的な転生観を批判することで、国学的な転生観が確立したことなどを明らかにした。すなわち、錨胤の転生観の特色は、①「生まれ変わり」といったことは確かに事実であるが、ごく希な出来事であるとしていること、②「生まれ変わり」は主に産土神の取り計らいによるものであると解釈していること、以上二点に集約されるのである。錨胤は儒者の説く転生否定論と仏者の輪廻転生説の両説を批判した。殊に、池田冠山の『勝五郎再生前世話』に示された仏教的な転生観を批判して、これに代わる国学的転生観を提示したのである。このように、錨胤は「生まれ変わり」の問題に取り組んでいるのであるが、その過程で幽冥論を深化させた。『勝五郎再生記聞』では、人の生前死後における産土神の役割の説明が加わっているのである。なお、『玉櫛』の中で、『勝五郎再生記聞』は産土神に関する神学的解

釈の中に生かされている。篤胤による産土神の役割の重視は、平田派国学の新たな展開を促していったといえよう。

このように、篤胤の『靈能真柱』『古史伝』などの書籍の刊行と頒布が幕末維新期の平田国学運動の柱になっていた。明治二〇年代のはじめに『古史伝』刊行が中断したように、この頃まで平田塾の出版活動が続いていたのである。『靈能真柱』『古史伝』の両者は、篤胤の主著であるが流布のあり方などには大きな違いがみられるのである。一方、『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』が写本として流布させたものであったことに注意しなければならぬ。平田塾ではこれらの流布にかなり慎重であったのである。篤胤の幽冥論は、これまで明確にされていなかった民俗的な他界観をはじめて体系化・言語化したことに意義があるといえよう。さらに、篤胤が幽冥の存在を実証しようとしていたことも重要である。なお、平田国学の幽冥論は柳田民俗学の中核をなすなど、近代の学術にも影響を与えていったとみられるのである。

(三) 篤胤の国学運動の展開と幕府の弾圧

第九章でみたように、篤胤が蘭学塾（蘭馨堂）に入門して蘭学を学んでいたことは重要である。篤胤著書の中で蘭学に言及している箇所を検討してみると、蘭学の各分野を高く評価していたことがわかる。すなわち、①西洋人は物を深く考えるために窮理には優れたものがある、②西洋の天文地理学は実測の努力に裏付けられた正確なものである、③西洋の医学・薬品には優れたものがあり「御国の用」となること大である、④西洋の四元説（風火水土）は「然ること」である、などと述べている。このように蘭学を率直に評価してこれらを国学の中に積極的に摂取しているのであった。国学者であっても蘭学などの外来の学問を学ぶ必要があると説いた。さらに、仏教や中国の学問を批判する道具としても蘭学を利用している。また、蘭学批判の論点は、①人知には限界があり西洋の窮理によってすべてが分かるわけではない、②西洋の天文地理学の観測実測には限界があつて天地の成り立ちまでは分らない、③西洋医学についても取捨選択して利用しなくてはならず、殊に人体解剖はするべきではない、西洋の薬品は使用を誤ると非常に危険である、④西洋人は正しい古伝説を知らないために四元説の根拠を知らないものであり、そもそも古伝説では五元説（風火金水土）が正しいのであつて西洋の四元説には金が落ちている、⑤蘭学者には西洋崇拜の悪しき傾向が見られる、などである。このように蘭学を取捨選択しながら国学に摂取しているが、その一方で蘭学者にしばしばみられる西洋科学の過信と西洋崇拜の傾向を激しく批判していたのである。

第一〇章では、篤胤による山村才助著『西洋雜記』受容の意味を検討した。才助自身は、西洋古伝を荒唐無稽なものとして否定的に紹介していたにすぎないが、篤胤はこうした見方を反転させて、西洋古伝を高く評価する。世界中の神話を比較検討しながら、真の古伝を復元しようとする篤胤にとって『西洋雜記』は特に重要であった。蘭学はもとも自然科学系を中心に発展したが、山村は西洋の世界地理・歴史について論じた最初の本格的な蘭学者であった。山村の写本『西洋雜記』（享和元年八月）の出現は、西洋古伝・歴史の研究の開始を意味していたのである。但し、山村自身は「最怪談なるべし」と述べているように、西洋古伝の信憑性を疑問視していたのである。一方、篤胤は文化四年から同六年頃に蘭学塾に学んでいるが、この時期に写本『西洋雜記』を読んだものと思われる。この雜記の多くの項目の中で、西洋古伝（ヘブライ古伝・エジプト古伝）の箇所特に注目する。篤胤の西洋古伝についての主要な情報源は、この『西洋雜記』であった。世界中の神話を比較検討して真の古伝を復元しようとする篤胤の研究にとって、たいへん貴重な資料となったのである。但し、篤胤は著書に『西洋雜記』を引用する際、表記を改変あるいは要約した上で利用しているのである。このように、山村が西洋古伝の信憑性に疑問を持っていたのに対して、篤胤はこの評価を逆転させたのである。こうして西洋古伝の知識を古伝研究に大いに利用していったのであった。

また、篤胤は多くの著書を執筆し刊行するとともに、幕藩体制下での思想運動を展開していた。第一章で述べたように、文政六年に上京しているが、これについては新史料『上京日記』に詳しいところである。上京と御所への著書献上の実態が明らかになったのである。文化一三年、篤胤は上京の計画を書状で門人に伝えている。上京した篤胤は服部中庸と頻繁に会って相談していた。中庸が宣長の遺言を篤胤に伝えたという有名な話は、実は八月一日であった。また、六人部是香と業合大枝が、篤胤の上京をきっかけに平田塾に入門している。両者は、山城や備前における平田派のリーダーとなる門人である。篤胤は六人部について「至てよき人かつ真才の人也」と記しているように、高く評価していた。ただし、篤胤との初会見から入門までに、一ヶ月もかかっているのである。この間、六人部は様子見をしていたようである。また、業合の場合も、「疑なく物になる男也」と高い評価を得た門人であった。篤胤の上京は、平田派の近畿・西国への浸透に一定の役割を果たしたということであろう。上京の最大の目的は仙洞御所・禁裏御所への著書献上であるが、富小路や六人部の協力によって、事前の入念な準備の末に実現したのである。御所で篤胤のことがたいへん評判になっていたという。篤胤は御所の認知を得ることで国学運動の正

当性と格上げを計ったのであろう。著書献上が実現したことに対して、中庸は「大ニ美名を顕シ候故門人杯も追々出来」と述べている。幕藩体制下における平田国学の台頭するさまを端的にとらえているというべきであろう。江戸に帰還した後に、篤胤は著述活動を急ぐなど国学運動を加速させたのである。生前の活動は上京を境に後半に入った。

第二章では、幕府の篤胤認識と篤胤の幕府認識を対比することで、両者の認識の齟齬を確認した。篤胤は「みさよし論」と「御武徳論」の二重の論理によって幕府統治を正当化するとともに、国学興隆が家康の意思によるものと説いた。このように幕藩体制の枠組みの中で国学運動を展開しようとしていたのである。しかし、幕府の方では早い段階から篤胤を警戒していた。天保五年段階で幕府は篤胤処分を一旦見送った。しかし、それ以後、幕府から問題と見られる事態が毎年のように発生した。結局、明確な理由が示されないまま、篤胤処分に至ったのである。篤胤側と幕府側では相互認識に大きな落差があったが、それが幕府の処分によって表面化したのである。幕藩体制と篤胤の国学思想との齟齬が露呈したのであった。幕府による処分は、その後の平田国学運動に大きな影響を与えたのである。

（四）平田国学の隆盛と幕末維新

第一章で述べたように、幕末維新时期に平田国学は隆盛をむかえることになる。幕府による処分が解除されないまま篤胤は秋田で死去したが、国学運動にとって大きな画期となったのである。平田派は時流を見極めながら慎重に行動していった。二代目の鋳胤の組織力・時代感覚が大いに発揮されたのである。平田塾の門人も次第に増加、書籍の大量頒布にもつながっていった。嘉永・安政期にしばしば不法な木活字本の出現に対処しなければならぬが、これもまた平田国学が盛んになっていくことの副産物というべきであろう。文久期以後、平田国学者は幕末維新の表舞台に登場する。変革の風が追い風となって躍進の時をむかえたのである。文久期の上京に続いて、慶応四年に再度上京した鋳胤・延胤は、新政府に出仕して文教・神祇行政に関与することになる。明治初頭の三年間が平田国学の絶頂の時期であった。しかし、明治四年に国事犯事件が発生、翌年延胤も死去した。明治四、五年頃が大きな転換点になり、新規の入門者が激減することになるのである。但し、晩年の鋳胤は平田塾の出版活動を継続していた。明治一〇年代に、胤雄は平田家の当主ではないが、国学運動にとって重要な役割をはたしたことに注意しなければならない。近世後期以来継続されてきた篤胤の著書や門人の著書の刊行に力をいれていたのである。明治二〇年代はじめまで積極的に刊行していた。平田家四代の盛胤は近代的な学知としての日

本文法の専門家であって、同時に神田神社々司として昭和二〇年に死去するまで活躍したのである。平田国学はそれぞれの段階に対応して歴史的位相を大きく変化させたのであった。

第一章で述べたように、幕末平田塾と地方国学は相互に連動して展開していた。弘前社中は鶴屋有節を中心とするグループである。弘前の商人・神職の社中であった。鶴屋は俳人としても有名であるが、国学に力を注いでいた。社中では、勉強会、歌会、霊祭などを行っていたのである。鶴屋は平田塾との間で書簡のやりとりをして、平田塾の書籍をまとめて購入し、社中に配っている。一方、塾側では、中央の状況や平田門の動向などを連絡していた。しかし、幕末になると弘前藩の命で入門する山田要之進のような人物も現れた。弘前国学の大きな転機といえるであろう。明治初期に平田門人は弘前ではあまり増えておらず、鶴屋も明治初期に死去した。平尾魯僊は、幽冥研究で有名であるが明治になって洋学が盛んになり国学が廃れていくことを深く嘆いていたのである。『幽府新論』の刊行をあきらめるなど新時代に不適應のまま死去した。下沢保躬は、明治四年に帰郷して以後様々な業務をこなしていったのである。公的な役職が多かったが、国学のうち史学的な素養を生かしていた。下沢の門人も多くいて、弘前国学の遺産は残っていくことになる。このように中央における平田国学運動が大きな転換点を迎えるとともに、地方国学もまた新たな方向を模索していった。平田学派は、近代国家の成立とともに再編されていくのである。

以上のように、第一章から第一章にわたって平田国学の歴史的展開を見てきたのである。これらを整理すれば、次のようになるであろう。

まず、平田国学から見たその時代についてである。市井の小さな学派として出発してやがて全国の草莽に拡大した。平田国学は近世・近代移行期に急激な成長を遂げたが、明治四〇五年頃に大きな転換点があったのである。鏝胤・延胤や門人が新政府に出仕したが、短期間に過ぎない。明治維新の実態が次第に明らかになるにつれて、理由は様々であるにしても、平田家や門人たちの多くにとって期待していたものとは程遠いと自覚されるようになる。大作『夜明け前』にも維新の現実には直面した平田国学者の心情がよく描かれているであろう。維新政権との方向性の違いの中に平田国学の大きな特徴があった。維新政権は平田派を排除して近代国家体制の確立を推し進めていったが、平田派の多くは被治者の側に再び戻って新たな道を模索していったのである。平田国学の時代は市井と草莽の覚醒を意味しているのであり、新たな時代の幕開けを期待する社会意識の高まりとその行方が

平田国学の盛衰を左右していたといえよう。

また、平田国学の思想と運動の関係について書物研究の視点から考察してきた。篤胤の生前の活動としては講釈とともに草稿の執筆が主なものであった。講釈と執筆によって平田国学が近世後期の江戸で次第に存在感を増していったのである。本論文では、近年勃興した書物研究によって平田国学の思想と運動について見直しを図ったのである。すなわち、①篤胤自筆稿本②平田塾による清書本③平田塾の版本④不法な木活字本・整版本⑤平田学会の『平田篤胤全集』の順にみてきたが、近世・近代移行期にあつて平田国学の拡大には書籍による教説の浸透が不可欠であった。明治二〇年代の初頭まで平田家では出版活動をしていたのであり、平田国学運動にとって書物の頒布は一貫して重要な課題であつたのである。その後、平田盛胤の代になつて江戸時代からの単なる継続ではなく近代に対応した新たな活動が進められたのであつた。

平田国学からみた一九世紀についてであるが、日本型国民国家形成過程において、平田国学は吸収・統合されたのであろうか。近代国民国家と平田国学との間の齟齬する側面が重要であると考えられる。すなわち、平田国学と一九世紀の日本型国民国家との間にかなりずれがあつたことに注意しなければならない。平田国学にはそうした枠組みでは収まらないものを多く内包していたのである。こうした点に注目すれば、平田国学の見方も大きく変化するはずである。通説では、あたかも平田国学が国民国家に統合されてすべてが解消されたかのように論じられてきたが、実はそうではないのである。

なお、本論文では近世・近代移行期を準備範囲としていることは序論で述べて通りであるが、平田国学の行方を見届けるためには二〇世紀にまで踏み込む必要が生じるのである。平田国学の近代の学術への影響であるが、日本民俗学の立場から柳田国男や折口信夫が平田国学の幽冥論を高く評価していたことに注意しなければならない。両氏はかなり意識的に平田国学を継承しているのである。民衆の心意・心性に注目する民俗学によって、平田国学が戦前・戦中に再発見されていたことの意義は大きい。柳田・折口の描いた平田国学像には、今日継承すべきものが多く含まれているのである。